

皆様ご存じの通り、三月三日は、「ひな祭り」、桃の節句です。

ひな祭りの起源には諸説あるそうですが、平安時代の京都で宮中の子女の楽しみとしてのひな遊びと節句の儀式とが結びついて、ひな祭りとして江戸期より広く親しまれるようになったと考えられています。一年ぶりにお内裏様とおひな様が並び、家の中も華やぐ時期です。

中国の唐の時代の漢詩を集めた『全唐詩』には、崔護という人物が詠んだ「都城の南 莊に題す」という詩があります。

崔護は、ある年に郊外を散策している折、のどが渇いて、水をもらいに桃の花が綺麗に咲く屋敷に立ち寄ります。そこで出会った桃の花のように佇む女性と互いに心を引かれ合いながらその場を去ります。そして同じ桃の花の咲く一年後、女性と会うために、再び同じ屋敷を訪れます。

しかしながら、たまたまその女性は外出をしており、そのときには会うことはできませんでした。名残惜しさから崔護は、屋敷に詩を書き付けます。

「桃花春風に笑む……去年の今日この門の中で、あなたの面差しと桃の花が互いに映えて紅色となっていた。あなたの面差しは今このときに、どこに行ってしまうのか。桃の花は、去年と同じように、春風に微笑んでいるというのに……。」

この詩を残した後、二人は再び出会い夫婦となる、というお話です。

同じ桃の花に因んだことであっても、仏教においては、また異なる視点から、桃が現れています。

崔護と同じく、唐の時代に活躍された靈雲志勤禪師は、桃の花の開くところに、また、道元禪師のお師匠様である如浄禪師は、桃の花の落ちるところに、それぞれの仏教的な世界観、つまり物事の本当のありようを見出していることが、道元禪師の著書『正法眼蔵』「優曇華」の巻において紹介されています。

咲く桃の花の美しさは、確かに私たちの目を奪いますが、その見た目の美しさだけが本来の桃の姿ではありません。道元禪師は、桃の花の咲き誇る姿も、またその花が落ちても、青々とした葉を残す姿も、葉を落とし幹と枝となる姿も……。

すべてその時々において、本来の桃の姿であることを私たちに示してくださっているのではないのでしょうか。